OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	太宰治と井伏鱒ニ ： 『井伏鱒二選集』をめぐって
Author(s)	滝口, 明祥
Citation	太宰治スタディーズ. 2008, 2, p. 101-115
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97246
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

太宰治と井伏鱒二

――『井伏鱒二選集』をめぐって――

滝口明祥

一、

「展望」の一九四八年三月号に、『井伏鱒二選集』の刊行を告げる広告が載っている。

> 現代日本文学に孤城を築く三十年清高飄逸よく独自の芸術境を護つて惑はず倦まざるわが井伏鱒二氏の最近作に至る全文学中よりこゝに太宰治氏に編輯解説の労を煩して選集を刊行する。読者は第一巻既に出世作「朽助のゐる谷間」を始め「山椒魚」「休憩時間」「鯉」「谷間」「夜ふけと梅の花」等長短十三篇悉く珠玉の文学に接して荒涼たる現世を化してなつかしき現実となす井伏世界の醍醐味に春のことぶれを聞く思ひを抱いて巻を措く能はざるであらう。

そしてそこには「編輯解説　太宰治」、「装幀　川端龍子」という大きな文字が付せられてもいるのである。そして刊行された各巻の巻末には太宰による「後記」（解説）が付された。太宰が書いた井伏についてのまとまった文章というのは、この「後記」をおいて他にない。たとえば太宰は『井伏鱒二選集　第一巻』（一九四八・三、筑摩書房）の「後記」では、井伏鱒二との来歴の始まりを次のように振り返っている。

> 私は十四のとしから、井伏さんの作品を愛読してゐたのである。二十五年前、あれは大震災のとしではなかつたかしら、井伏さんは或るささやかな同人雑誌に、はじめてその作品を発表なさつて、当時、北の端の青森の中学一年生だつた私は、それを読んで、坐つてをられなかつたくらい興奮した。それは、「山

椒魚」といふ作品であつた。童話だと思つて読んだのではない。当時すでに私は、かなりの小説通を以てひそかに自任してゐたのである。さうして「山椒魚」に接して、私は埋もれたる無名不遇の天才を発見したと思つて興奮したのである。

中学一年生の太宰が「発見」したのは、「世紀」（一九二三・七）に載った井伏の小説であり、題名は正確には「幽閉」というものであっただろう。言うまでもなく「幽閉」はその後改稿されて「山椒魚」となるのであり、当時の太宰がどれほど「興奮」したのかはともかくとしても、実際に井伏の作品をかなり早い段階から読んでいたことは間違いない。その後太宰は、一九二八年に井伏に自身が編集・発行していた同人誌「細胞文芸」への原稿依頼を行っているからである。当時の井伏は未だほとんど注目されてはおらず、「無名不遇」の時代であったと言ってよい。[1] そんな井伏を、夏休みに上京した太宰は、直接に訪問してもいるのだ。その時は井伏が不在だったことにより会えなかったようだが、井伏からは「薬局室挿話」という短編が太宰の元に送られ、無事「細胞文芸」に掲載されている。そして太宰が大学入学のために上京してから本格的な師弟関係が始まるのであり、その過程においてはパビナール中毒による入院になった太宰を井伏が入院させたり、太宰と石原美知子との結婚の仲人を井伏が務めたりといったエピソードがあるわけだが、このような師弟関係は他に例を探すことが難しいように思われる。

そして、そのような井伏との来歴が記された一文が掲載された『井伏鱒二選集』は、近年新たな注目を集めている。それはこの時期の太宰と井伏との確執に関連するものであり、そこでは井伏のある作品が決定的な役割を果たしたものとして語られる。たとえば猪瀬直樹は、次のように指摘している。

第一巻の解説を書いたあと二巻以降にとりかかろうとして井伏の作品を読み返した。竹村書房刊の短編集『禁札』をめくると、見たことのないタイトルの短篇があった。読んで愕然とした。

「薬屋の雛女房」という作品。薬屋の若妻を主人公にしつつ船橋時代の太宰と初代の姿をあからさまに描いているが、『婦人公論』十三年十月号に掲載されたので、太宰が御坂峠に着いたばかりだからその存在を知らなかった。衝撃は大きかった。[2]

このような猪瀬の記述は、参考文献に挙がっている川崎和啓の論文[3]を元にしているのだと思われる。そこで川崎は、太宰が井伏に対して批判的になった要因として、「薬屋の雛女房」の存在を挙げて

いる。ただしそこでは、次のように慎重な留保がなされてもいた。

「薬屋の雛女房」は昭和十三年に『婦人公論』に発表されたあと、同十四年三月発行の小説集『禁札』（竹村書房）に収録された以外はどこにも収められていない。そして、この二度の機会に太宰がこの作品を読んだかどうかもわからない。（ただ、この二つが発行されたのは、太宰が山梨県の御坂峠にこもり、井伏の媒酌で美知子夫人と結婚して甲府に新居を構えた頃であり、東京との関係が希薄になっていたことから、これらを目にしえなかった可能性は十分にある。）また、『井伏鱒二選集』の「後記」によると、太宰は、同二十二年の「夏」にはその選集のために井伏の「作品全部を、あらためて読み直してみる事」になったというが、このとき彼が本当に井伏の「作品全部」を読んだかどうかもわからない。

両者を比較すれば明らかなように、川崎の論文では「これらを目にしえなかった可能性は十分にある」という単なる推測だったものが、先の猪瀬の著作では厳然たる「事実」であるかのように変わっているのだ。しかも、このような見方は井伏に対する評価という点では両者と立場を異にする加藤典洋の著作[4]においても踏襲されているのであり、かくして太宰と井伏の確執において「薬屋の雛女房」という作品が決定的な役割を担っていた、という「事実」が世間に流通していく。だが、それは本当に正しいのだろうか？

太宰と井伏の確執を「薬屋の雛女房」に、或いは個人的な感情のもつれにのみ求めるのではなく、もっと大きな時代的背景との関わりを考えることが必要なのではないか。何故なら両者の確執には、「戦後」という時代が間違いなく関わっていると思われるからだ。太宰が井伏に感じた苛立ちは決して特別なものではなく、同時代の論者に共有されるものでもあった。だが、これまでそれは充分に意識されてきたとは言いがたいのである。もちろんそのことを探るためには、一九四八年における太宰と井伏のそれぞれの在り方を確認することも必要となってくるだろう。

二、

それでは、まず事実関係を確認することから始めよう。

太宰と井伏の確執が公の場で取り沙汰されたのは、一九四八年六月の太宰入水に際し、遺書に「井伏さんは悪人です」とあったことに始まる。このことは当時のジャーナリズムでも大きく取り扱われている。「時事新報」のインタビューに答えて井伏は、「わたしのことを悪人だといっているそうだが全然思いあたるふしはない、

〔……〕太宰君は最も愛するものを最も憎いものだと逆説的に表現する性格だからさういうつもりでいつたのだろう、太宰君は文学だけで生きていた人だから、最近書けなくなつたと錯覚を起して死んだのではないかと私は考えている」[5]と答えている。また佐藤春夫はそうした報道を受けて次のように書いた。

太宰は逆説的表現を好む男であつたから、井伏鱒二は悪人なりと書いてあつても自分は大して奇異には思はない。むしろ、「井伏さんには長い間いろいろ御世話になりましたありがたう」と書いてあつたとしたら、かへつて変な位なものであらう。また、太宰が井伏を本当に悪人と感じたとしたら井伏鱒二は悪人なりなどとそんな単純な気の利かない云ひ方で満足したであらうか。如是我聞の筆法で、も少しは云ひ方がありさうなものである。然らば井伏鱒二は太宰治にとつてそれほどの毒舌にも値しない悪人であつたに相違ない。自分は亡友の文章の一句を文字どほりに正しく読まうとする者である。[6]

その後も「井伏さんは悪人です」という記述が太宰の本心を表したものとされることは長らくなく、例えば相馬正一は「現に『井伏鱒二選集』の編集責任者として各巻の「後記」を手がけている太宰にとって、「井伏さんは悪人です」などというセリフは全くナンセンスなものとしか考えられない」[7]と全面的に否定している。

だが、太宰の二十三年版の手帖に書かれてある次のようなメモを見たとき、「井伏さんは悪人です」という一文は、少なくとも「逆説」や「ナンセンス」ではなかったと言わざるをえない。

井伏鱒二　ヤメロ　といふ、足をひつぱると〔□〕いふ、「家庭の幸福」ひとのうしろで、どさくさまぎれにポイ〔□〕ントをかせいでゐる、卑怯、なぜ、やめろといふのか、「愛?」私は、そいつにだまされて来たのだ、人間は人間を〔だませ〕愛することは出来ぬ、利用するだけ、思へば、井伏さんといふ人は、人におんぶされてばかり生きて来た、孤独のやうでゐて、この人ほど、「仲間」がゐないと生〔□〕きてをれないひとはない、井伏の悪口を言ふひとは無い、バケモノだ、阿呆みたいな顔をして、作品をごまかし（手を抜いて）誰にも憎まれず、人の陰口はついても、めんと向つては、何も〔□〕はず、わせだをのろひながらもわさ〔□〕だをほめ、愛校心、ケツペキもくそもありやしない最も、いやしい政治家である。〔……〕私は、お前たちに負けるかもしれぬ。しかし、私は、ひとりだ。「仲間」を作らない。お前は、「仲間」を作る。太宰は気違ひになつた

か、などといふ仲間を、ヤキモチ焼き、悪人、イヤな事を言ふやうだが、あなたは、私に、世話したやうにお〔□〕つしやつてゐるやうだけど、正確に話しませう、かつて、私は、あなたに気にいられるやうに行動したが、少しもうれしくなかつた。

（「62」～「70」）[8]

やはり一九四八年において、太宰が井伏に対して鬱屈した心情を抱いていたのは否定できないのである。だが、それは果たして、いつからなのだろうか。太宰は一九四六年十一月に東京に出てくるまでは青森に疎開していたのだが、同じく広島の郷里に疎開していた井伏に宛てて親しい手紙を何通も出している。そして一九四七年七月には例の『井伏鱒二選集』出版のための打ち合わせが太宰の斡旋で開かれている。筑摩書房の社主である古田晁と編集者の石井立、太宰と井伏の四人の会合であった。井伏は後にこの時のことを振り返って、「私の選集出版の企画は、私が東京へ転入する前に太宰が勝手に古田のところへ話を持ちこんで決定させたらしい。私は石井君から聞かされるまで知らなかつた」[9]と述べている。そもそも井伏はこの時点において、筑摩書房からはまだ一冊も著書を出版していない。古田ともこの時が初対面であった。対して太宰は、すでに『千代女』（一九四一・八、筑摩書房）、『お伽草紙』（一九四五・十、筑摩書房）を出しており、古田にも高く買われていた。石井の筑摩書房入社は太宰の世話によるものと言われている。[10]『井伏鱒二選集』出版に際して、太宰の貢献が少なくなかったことは確かだ。

井伏に対して太宰が何か遺恨を抱いていたのだとすれば、わざわざ選集の出版を世話するとは考えにくい。つまり、少なくとも一九四七年の夏頃までは太宰は井伏に対してそれほどまでの鬱屈を感じてはいなかったということだろう。とするならば、やはり『井伏鱒二選集』の編集時期と、太宰が井伏から気持ちが離れていった時期が重なるのである。

三、

初めに述べたように、刊行を告げる広告には「こゝに太宰治氏に編輯解説の労を煩して選集を刊行する」と大きく書かれているのだが、実はここでは『井伏鱒二選集』は全七巻と掲載されている。だが、実際には全九巻で刊行されているわけで、太宰の死後に二巻分増補されたということである。[11]この経緯についてはよく分かっていないのだが、増補前と増補後の巻構成を並べて掲げておこう。

【増補前】

第一巻「屋根の上のサワン」、第二巻「悪い仲間」、第三巻「鶏肋集」、第四巻「円心の行状」、第五巻「多甚古村」、第六巻「厄

除け詩集」、第七巻「引越やつれ」

【増補後】

第一巻「屋根の上のサワン」、第二巻「悪い仲間」、第三巻「鶏肋集」、第四巻「円心の行状」、第五巻「多甚古村」、第六巻「架空動物譜」、第七巻「牡丹の花」、第八巻「山峡風物誌」、第九巻「白毛」

比べてみれば、第六巻以降が変更されていることが分かる。詩と随筆が収められる予定だった「厄除け詩集」の巻が「架空動物譜」と「牡丹の花」に分けられ、終戦後の新作集であった「引越やつれ」の巻も「山峡風物誌」と「白毛」に分けられたのである。もちろんそれによって戦後に書かれた文章が予定よりも多く収められることになったわけであり、そこには太宰治の死について書かれた多くの文章も収められることとなった。

太宰が第四巻まで担当していた「後記」を第五巻から引き継いだ上林暁は、「それにしても、「太宰治のこと」「十年前頃」「亡友」などと、矢継ぎ早やに太宰治追憶の文章を書かねばならぬ時が、かくも遽しく訪れようとは、井伏氏も全く予期せぬことであつたらう」[12]と書いている。「太宰治のこと」（「文藝春秋」一九四八・八）、「十年前頃」（「群像」一九四八・十一）、「亡友」（「別冊風雪」一九四八・十）などは、いずれも太宰の死がなければ書かれることのなかった文章であり、太宰治とのこれまでの思い出について書かれている。特に「太宰治のこと」では太宰との約二十年にわたる交友がトータルに記述され、「東京に転入して以来、私は滅多に太宰君に会ふ機会がなかつた。」、「いま私は、自分のしてきたことについて悔いることがないとはいはれない。ことに最近に至つて、或ひは旧知の煩はしさといふやうなものを、彼に感じさせてゐたかもわからない」と、太宰との仲がうまく行っていなかったことを自ら明かしてもいる。

繰り返すが、これらの文章は太宰の死がなければ書かれることはなかったし、『井伏鱒二選集』に収録されることもなかった。もちろん、「後記」も太宰が全巻担当していただろう。『井伏鱒二選集』は太宰の死によって大きく彩られているのだ。だが、このことはこれまでほとんど問題にされたことがない。一般には『井伏鱒二選集』の編集解説は太宰が担当した、と言われることが多いのだが、既に確認したように、第六巻以降は太宰の死後になって変更されているのであり、太宰が「編集」に関与していると言えるのは第五巻までに過ぎない。

しかも第五巻までに限ってみても、編集解説は太宰が担当した、と言えるかどうかは微妙である。というのは、太宰は『井伏鱒二選集 第二巻』（一九四八・六、筑摩書房）の「後記」で次のように書いているからだ。

ところで、私の最初の考へでは、この選集の巻数がいくら多くなつてもかまはぬ、なるべく、井伏さんの作品の全部を収録してみたい、そんな考へでゐたのであるが、井伏さんはそれに頑固に反対なされて、巻数が、どんなに少くなつてもかまはぬ、駄作はこの選集から絶対に排除しなければならぬといふ御意見で、私と井伏さんとは、その後も数度、筑摩書房の石井君を通じて折衝を重ね、たうとう第二巻はこの十三篇といふところで折合がついたのである。

ここで太宰が言っているように、作品の選定にあたっては井伏の意向も強く働いたらしい。太宰は『井伏鱒二選集　第四巻』（一九四八・十一、筑摩書房）の「後記」にも、「れいに依つて、発表の年代順に、さうして著者みづからのその作品に対する愛着の程をも考慮し、この巻には以上の如き作品を収録することにした。」と書いている。太宰宛井伏鱒二書簡（一九四七・九・四）には、「せんだつて石井君に〔『井伏鱒二選集』の〕目録を見せてもらひましたが大体あれで全部だらうと思ひます」とあるように、そのやり取りが垣間見える。

そしてその過程で、『井伏鱒二選集』が当初太宰が思い描いていた姿とは微妙に変わっていったことは事実であろう。或いは感情的な行き違いが生まれることもあったかもしれない。「井伏鱒二選集通信」（月報）第二号に掲載されている伊馬春部の次の文章は、その辺りの消息を伝えているようにも思われる。

その「仕事部屋」が、この選集に納められないと聞いてがつかりしたのは、今年の二月八日だつた。なぜそんなに日付がはつきりしてゐるかといふと、それは太宰を訪問した日だからであり、そしてその日が、私が彼にあつた最後の日だつたからである。手紙で約束してあつたので、その時間に仕事部屋を訪ねると、太宰は待ちかねた風にさつそくお酒のお燗だつた。そこへ選集の編輯の人が、校正刷を持つて来たのである。〔…〕えゝと「仕事部屋」は第何巻になるんだねと聞いたことに、実はじまるのである。

あれは出ません。それは困る出していたゞかうぢやないかなど言つてゐると、そんなことといふと叱られるぞ、僕もひどく叱られたんだからと太宰は、盃をおいて後記の校正にしゝとして目をそゝいだ。(13)

四、

ところで猪瀬直樹は井伏の「薬屋の雛女房」に関して、次のよう

なことも書いている。

井伏がどんな人物か、どれほどいい加減な作品を書いてきたか、はっきりさせてしまおう、と太宰はたくらんだ。だが「薬屋の女房」の収録を井伏鱒二は拒否した。〔井伏鱒二選集〕第二巻の解説の冒頭の文章はそのあたりのことをほのめかしている。(14)

ここで猪瀬が言っている「第二巻の解説の冒頭の文章」とは、前節で引用した「第二巻後記」の冒頭の部分のことである。猪瀬がどのような根拠で「「薬屋の雛女房」の収録を井伏鱒二は拒否した」と書いたのかはよく分からないが、太宰が書いた『井伏鱒二選集』草案が二種類残されており（以下、より前に執筆されたと思われる草案を「a系統」、後に執筆されたと思われるものを「b系統」と表記）、『太宰治全集』第十三巻（筑摩書房、一九九九・五）に収録されているので確認しておこう。それを見てみると、とりあえず「薬屋の雛女房」というタイトルは見あたらない。少なくともこの二種類の草稿が書かれた時点では、太宰は「薬屋の雛女房」を収録することは考えていなかったようだ。もっとも、この草稿はいずれも企画のかなり初期の段階に書かれたものだと思われ、この時点で太宰はまだ「薬屋の雛女房」が収録された『禁札』（竹村書房、一九三九・三）を読んでいなかったのだ、と言えないこともない。だが、この草案を眺めたとき、猪瀬の記述には疑問を抱かざるをえないのである。

草案の中には、実際に刊行されたものには収録されなかった作品名が多く記されている。たとえば、a系統の草案を見ると、太宰は井伏の最初の作品集である『夜ふけと梅の花』からは全作品を収録するつもりでいたようだが、b系統においては「ジョセフと女子大生」「岬の風景」「打ち合はせ」「一ぴきの蜜蜂」の作品名は書かれているものの線が引かれて消されている。また、b系統の「第二巻　目次」には、「たま虫を見る」「談判」「或る交友の素描」「十二年」「背の高い椅子の誘惑」「風雨強かるべし」「布団屋の来訪」「ユキコ」「経緯」「客人」「先生の広告隊」「言葉について」「使徒アンデレの手紙」「森」「りべるて座」の作品名が見えるが、これらも実際に刊行されたものには収録されていない。太宰の「第二巻後記」は今右に挙げたような多くの作品の収録が断念されたことを言っているのだと考えるのが自然なのであって、とりたてて「薬屋の雛女房」を特筆しなければならない必要があるとは思われないのである。

もちろん、それらの収録が断念されたのが全て井伏の意向によるものだと考えることにも無理があるだろう。巻数やページ数などに

ついては出版社の意向も無視できなかったはずだし、太宰自身が後から収録作品を入れ替えたことも充分に考えられる。右に挙げた作品の中、「談判」「或る交友の素描」「十二年」「背の高い椅子の誘惑」「風雨強かるべし」「布団屋の来訪」「ユキコ」「経緯」「客人」「先生の広告隊」「使徒アンデレの手紙」「森」などは、a系統にはなくb系統になって出現したもので、しかし結局は作品名に線が引かれ消されている。この複雑な動きを全て井伏によるものだと説明することは出来ない。ある作品について、選定したのが太宰なのか井伏なのか、明確に線を引くことは著しく困難なのだ。

太宰による『井伏鱒二選集』の草案に見あたらず、実際に刊行されたものには収録されている作品としては、「中島の柿の木」「山を見て老人の語る」「ミツギモノ」「掛け持ち」「お濠に関する話」「川井騒動」「へんろう宿」「小間物屋」「御神火」「鐘供養の日」「隠岐別府村の守吉」「吹越の城」「防火水槽」「多甚古村」「多甚古村補遺」などがある。概して言えば、日中戦争開始から敗戦までの間の作品が多いと言えるだろう[15]。もとより太宰とて初めから全ての井伏作品が視野に入っていたとは考えにくいから、このこと自体は取り立てて問題にするようなことではないかもしれない。だが、「井伏の名誉を普遍的にした」[16]、「彼の全作品の中で最も有名」[17]などと言われる「多甚古村」が草案の中に見あたらないことは、やはり不自然と言わざるをえないように思われる。

五、

駐在巡査の視点を通して地方の村に暮らす人たちの日常を描いた『多甚古村』（河出書房、一九三九・七）は「ベストセラー」[18]となり、その年の暮れには新国劇で上演され、翌年には映画化もされている[19]。戦前戦中を通しての井伏の代表作であると言ってよいだろう。文壇内では井伏はすでに中堅作家としての位置を確立していたのだが、一般的な知名度を得たという点において「多甚古村」が果たした役割は決して小さくなかったのである。

同時代評を眺めてみても、この作品が好評のうちに迎えられたことが分かる。刊行の二ヶ月後には早くも菊池寛が、「井伏鱒二君の「多甚古村」と云ふ本を面白くよんだ。読後二、三日楽しかつた」[20]と推賞したのを初めとして、中島健蔵は「『多甚古村』は、再び民衆の知恵の明るさを、前よりもしつかりした腰つきで我々に示すことになつた」とし、それまで不調であるとされていた井伏の「再起」をそこに認めている[21]。また河上徹太郎は映画化されるという話を挙げ、「矢張り映画人が眼をつけさうな代物だ、とうなづける作品である」とし、次のように述べている。

「多甚古村」は、確かに此の作者の近来の傑作であり、その文学的資性の最も厭味のない現れであり、氏の生来の想像力が邪まな誘惑に乗ることなく健やかに働き続けてゐることのいゝ証拠である。材を一寒村の若い巡査の駐在日記にとり、その村の老若男女あらゆる種類の人々の行状を為すことによつて、世相と良識と詩情を現さうとしたものであり、殊に警察沙汰の面から描いたことは、作者が所謂世の苦労人であることから見ても、うつてつけの形式なのである。(22)

その他にも、「作者の本道にあつて成功した微笑ましい一篇」(23)だとか、「氏の近頃の秀作」(24)である、或いは「井伏鱒二の半生にわたる作家的努力を、井伏らしくさも何気なく集成してみせた秀作と云ふことができるであらう」(25)などと概ね好意的な意見が続いている。

だが、それが戦後になると評価に明らかな変化が表れるのだ。たとえば『井伏鱒二選集』の刊行とほぼ同時期に発表された寺田透の評論では、『多甚古村』は「面白くはあつたけれども好きになれなかつた」とされ、次のように述べられている。

> 作者の世俗的興味が弾みすぎてゐる。ここにあるのは人間に対する愛情といふより、世態人情の面白さに釣られた興味の動きなのだ。〔…〕話の種は深刻であらうと多彩であらうとそれらを追ふ井伏の目は、世間話に身を入れた人間の心のやうにひどく通俗的で大まかなのだ。

井伏を「敬愛する作家のひとり」だと言う寺田は、「結局井伏鱒二は、世態人情、花鳥風月の風情ゆたかな画家たるにとどまるのだらうか。あへてその域を出ようとしないのであらうか」と不満を述べずにはいられない。その際に象徴的な作品として持ち出されたのが『多甚古村』であった。そして寺田は「『多甚古村』『同補遺』が、井伏鱒二らしくないと思はれるのにもかかはらず、いかにも井伏鱒二的であることにまごついた」と述べるのである。(26)

また翌一九四九年には、杉浦明平が井伏鱒二を「庶民」の文学として評価しつつも、『多甚古村』に関しては「おかみの力をもった解決者」が主人公の「人情噺」であるとして、次のように述べている。

> 今われわれはこの作家井伏のうちにあの侵略戦争を疑わなかった庶民の姿を見とめなければならぬ。目隠しされた視野の中におかれ、おかみによりかかることに馴らされたこの国民が、万歳の声と日の丸の旗におくられ又おくって侵略戦争に勇躍して赴いた日のことが思い出される。〔…〕そのように悪しき意味

においても井伏は庶民の中にいる作家であった。[27]

一九四七年に長谷川鑛平が井伏作品の中に「社会へのアンチテーゼ、ひとつの世界観へのアンチテーゼ」があることを認めつつも「積極的な世界観」の欠如を批判しているのも、寺田や杉浦の不満と通じ合うものがあるように思われる。[28]そしてこのような批判が、「戦後」という時代を背景としたものであったことは明らかだ。[29]

寺田や杉浦の『多甚古村』に対する不満を中村光夫が『風俗小説論』（一九五〇・六、河出書房）の中で述べた不満と関連させて考えることも出来るだろう。実際、中村は戦前における井伏の現代小説、なかんずく『多甚古村』に関して、次のように批判的な見解を述べている。

> むろんこの村の駐在所の主は、村民たちの生活のなかに溶けこみ、権力の代表者といふより庶民の世話役といふ感じで、氏の作品のなかでこれがもつとも有名なのも偶然でないと思はれます。しかしこの三十前後の独身者でありながら老成の風格を備へ、職務の枠のなかで許された範囲でしか心を動かさぬ主人公は、やはり模範巡査であり、この小説は、国民の誰が読んでも差障りのない健全娯楽なのです。[30]

だが、「多甚古村」が収録された『井伏鱒二選集　第五巻』（一九四八・十二、筑摩書房）の「後記」に書かれた上林暁の見解は寺田や杉浦のものとは著しく異なっていた。そこで上林は、「多甚古村」を書く「作者の筆は天衣無縫」であり、「その軽妙な刷毛によつて、多甚古村といふ、現実的でありながら、また現実離れのした世界が、そこに目に見る如く現出してゐる」と絶賛していたのである。

六、

先述したように、一九四七年以降、太宰が井伏に対して批判的になっていったことは確かである。それでは、太宰は井伏のどのような面に苛立ちを感じていたのだろうか。たとえば『井伏鱒二選集　第四巻』（一九四八・十一、筑摩書房）の「後記」で太宰は井伏を「旅行上手」にたとえて、次のように述べている。

> 金銭の浪費がないばかりでなく、情熱の浪費もそこにない。井伏さんの文学が十年一日の如く、その健在を保持して居る秘密の鍵も、その辺にあるらしく思はれる。
>
> 旅行の上手な人は、生活に於いても絶対に敗れることは無い。謂はば、花札の「降りかた」を知つて居るのである。
>
> 旅行に於て、旅行下手の人の最も閉口するのは目的地へ着く

までの乗物に於ける時間であらう。すなはちそれは、数時間、人生から「降りて」居るのである。〔…〕所謂「旅行上手」の人は、その乗車時間を、楽しむ、とまでは言へないかも知れないが、少くとも、観念出来る。

この観念出来るといふことは、恐ろしいといふ言葉をつかつてもいいくらゐの、たいした能力である。

この文章について東郷克美は「十数年にわたって師事してきただけにさすがに井伏文学の本質をよく見抜いた言葉であり、同時に太宰の立場からする井伏批判にもなっている」[31]と指摘しているが、これまでこうした太宰の井伏批判は、太宰と井伏の間における個人的な対立として解釈される傾向が強かった。だが、前節で確認したような寺田や杉浦の批判をみるとき、この太宰の言葉が決して特別なものではないことは明らかだろう。

先に挙げた二十三年版の手帖の中にある「作品をごまかし（手を抜いて）」[32]という太宰の言葉にしても、寺田が言う「世態人情、花鳥風月の風情ゆたかな画家たるにとどまる」[33]ことに対する批判として考えることが出来るのではないか。もちろん、太宰が故意に『井伏鱒二選集』に「多甚古村」を収録しようとはしなかったという証拠があるわけではない。だが、少なくとも上林暁のような絶賛をしなかったことだけは確かだ。初期作品が収められた第一巻の「後記」には井伏作品に対する批判がほとんど見られないのに対して、戦中期の作品が収められた第四巻のそれには強く出ているのも、執筆時期の差によるものとばかりは思われない。

『井伏鱒二選集』編集のために井伏の旧作を読み返す過程において、或いはその収録作品を選定する際の井伏とのやり取りの過程において、太宰の中で井伏の作風に違和感が高まっていったということは充分に考えられよう。[34]また、そこには「戦後」における太宰自身の変化、という要素も含まれるようだ。

一九四六年においては井伏宛書簡（一九四六・一・十五）において、「私は無頼派ですから、この気風に反抗し、保守党に加盟し、まつさきにギロチンにかかつてやらうかと思つてゐます」などと「新型便乗」批判を繰り広げていた太宰であったが、一九四七年以降の太宰を同じ位相のもとに捉えることは出来ないのではないか。「戦争中には日本に味方するのは当り前で、馬鹿な親でも他人とつまらぬ喧嘩してさんざんに殴られてゐるとやつぱり親に加勢したくなります。黙つて見てゐるなんて、そんな人間とは、おつき合ひごめん」（前掲井伏宛書簡）と書いた太宰と、「倫理においても、新しい形の個人主義の擡頭してゐるこの現実を直視し、肯定するところにわれらの生き方があるかも知れぬと思案することも必要かと思はれる」[35]

と述べ、「新しい徒党の形式、それは仲間同士、公然と裏切るところから始まるのかもしれない」[36]と述べた太宰とを同一のものとして捉えることには無理があるように思われる。一九四五年八月十五日を境に全く違う人間に変わるなどということはありえない。そのことは太宰が誰よりもよく分かっていたはずであるが、一方でこの時期、何らかの変化の必要性を感じていたこともまた確かだろう。[37]

太宰の井伏批判について考えるには、「戦後」という時代背景を考慮に入れる必要があるように思われる。個人的な対立のみに還元するのではなく、同時期の他の論者たちとの共通性を踏まえた上で、その差異について見ていくべきだろう。そして寺田や杉浦が「愛読者」としての立場から井伏作品を批判していたように、太宰もまた単に井伏を憎んでいたというわけではなかったに違いない。『井伏鱒二選集　第一巻』（前掲）の「後記」にある「これらの作品はすべて、私自身にとっても思ひ出の深い作品ばかりであり、いまその目次を一つ一つ書き写してゐたら、世にめづらしい宝石を一つ一つ置き並べるやうな気持がした」という言葉は草案の段階で既にほぼ書かれていたものだが、一九四八年の太宰においても依然として井伏への敬愛の念を全く捨て去るということは出来なかったはずだ。さらに言うなら、誰よりも「徒党」に憧れていたのは、太宰自身ではなかっただろうか。「仲間同士、公然と裏切る」ことが最も苦手だったのは、太宰自身ではなかっただろうか。[38]

一方、井伏のほうも時代から超然としていたというわけではないのであって、たとえば寺田透は、「戦争終結後の彼の作品、『経筒』や『橋本屋』などによってみても、作者のあとじさりの気配は相当に濃厚であり、彼はもはや以前のように、作中人物を茶化したり、おもちやにしたりすることを、全くやめたやうである」[39]と指摘している。井伏もまた「戦後」の中で変化しつつあったということだろう。だが、それは、太宰にとっては或いはものたりないものでしかなかったのかもしれない。ここで「あとじさり」と言っていることからも分かるように、寺田にとっても井伏の変化は積極的に評価する対象とまではいかなかったのである。

寺田が戦後の井伏作品に対する積極的な評価に転じるのは、一九五三年になってからのことだ。そこで寺田は、「戦後の井伏氏は、あとを濁さぬ精神の飛行力をわがものとしてゐる」のであり、「かれのかるみは的確さに裏づけられ、諧謔はきびしいモラリストとしての人間把握そのものの持ち味となつてゐる」と絶賛と言ってよい言葉を記しているが、最後に次のように付け加えている。「以上のべた見解すべての基調となつてゐるのは、『白毛』以後の作品が僕に与へる印象である。といふことは太宰治死後の作品が特に凄いといふことにほぼ等しからう」[40]と。中村光夫もまた、太宰の死後に発表された

「遥拝隊長」（「展望」一九五〇・二）を「多甚古村」に比較した上で井伏の戦後作品を高く評価しているわけであり[41]、この寺田の言葉はなかなかに意味深いものに思われる。むろんそうした評価に対する検討を行うためには、一九四五年から一九五〇年前後に発表された井伏の作品群およびその受容を細かくみていかねばなるまいが、それはもはや本稿の範囲を超えるものであるだろう。

注

(1) 東郷克美「井伏鱒二―「無名不遇」時代の位相」（「解釈と鑑賞」一九九八・六）を参照。

(2) 猪瀬直樹『ピカレスク』（二〇〇〇・十、小学館）

(3) 川崎和啓「師弟の訣れ―太宰治の井伏鱒二悪人説」（「近代文学試論」二九号、一九九一・十二）

(4) 加藤典洋『太宰と井伏』（二〇〇七・四、講談社）。加藤は井伏の「薬屋の雛女房」について、「若いバビナール中毒患者夫婦の切なさを滲ませた、井伏らしい佳編」として評価するものの、それを太宰がどう受け取ったかという点に関しては猪瀬の判断に従っている。

(5) 「死体あがらぬ〝人食い川〟／太宰氏捜索」（「時事新報」一九四八・六・十七）

(6) 佐藤春夫「井伏鱒二は悪人なるの説」（「作品」一九四八・十一）

(7) 相馬正一『太宰治と井伏鱒二』（一九七二・二、津軽書房）

(8) 『資料集 第二輯 太宰治・晩年の執筆メモ』（二〇〇一・八、青森県近代文学館）

(9) 『回想の古田晁』（一九七四・十、筑摩書房）

(10) 『筑摩書房の三十年』（一九七〇・十二、筑摩書房）を参照。

(11) ただし、売れ行きはそれほどよくはなかったらしい。野原一夫『含羞の人』（一九八二・十、文藝春秋）は、『井伏鱒二選集』など戦後に筑摩書房が出した「いくつかの個人全集・選集」は「いずれも売行きが悪く、経営悪化の原因とな」ったと指摘している。

(12) 上林暁「後記」（『井伏鱒二選集 第七巻』一九四九・七、筑摩書房）

(13) 伊馬春部「あど・ばるうん記」（『井伏鱒二選集通信 第二号』一九四八・十一、筑摩書房）

(14) 猪瀬前掲（注2）

(15) 他に、伊馬が名前を挙げた「仕事部屋」や直木賞受賞作の「ジョン万次郎漂流記」のように草案の中にも実際に刊行されたものの中にも見あたらない作品もある。このことについては、別稿で論じることとしたい。

(16) 長谷川鑛平「井伏鱒二論」（佐藤春夫・宇野浩二編『昭和文学作家論』一九四四・四、小学館）

(17) 杉浦明平「庶民文学の系譜」（「午前」一九四九・二）

(18) 堀部功夫「多甚古村」（『井伏鱒二の風貌姿勢』一九九八・二、至文堂）

(19) 演劇は高田保の脚本・演出であり、映画は八田尚之が脚色を、今井正が監督を担当した。杉林隆「『多甚古村』試論」（「姫路工業大学環境人間学部 研究報告」四号、二〇〇二）を参照。

(20) 菊池寛「話の屑籠」（「文藝春秋」一九三九・九）

(21) 中島建蔵「文学的人物論・井伏鱒二」（「文芸」一九三九・十一）。但し引用は『現代作家論』（一九四一・九、河出書房）より。

(22) 河上徹太郎「最近の長編小説・完璧の仮構」（「帝国大学新聞」一九三九・十一・六）

(23) 酒井森之介「井伏鱒二論」（吉田精一編『展望・現代文学』一九四一・三、修文館）

(24) 板垣直子『事変下の文学』（一九四一・五、第一書房）

(25) 長谷川前掲（注16）

(26) 寺田透「井伏鱒二論」（「批評」一九四八・三）

(27) 杉浦前掲（注17）

(28) 長谷川鑛平「暁・一雄・鱒二」（「文芸」一九四七・三）。ちなみ

に、石崎等「解説」（『日本文学研究資料叢書　井伏鱒二・深沢七郎』一九七七・十一、有精堂）は、長谷川の論の背景として豊島與志雄「文学に於ける構想力」（『文芸』一九四五・十）を挙げている。

(29) もっとも、「多甚古村」に或る程度の社会諷刺を認めることも不可能ではないはずだ。その点に関しては別稿を期したい。東郷克美「『多甚古村』の周辺」（『国文学ノート』十一号、一九七二・三）、前田貞昭「二つの『多甚古村』―日中全面戦争下の井伏鱒二」（『近代文学試論』二二号、一九八四・十二）などを参照。

(30) 中村光夫「井伏鱒二論」（『文学界』一九五七・十～十一）

(31) 東郷克美「井伏鱒二素描」（『日本近代文学』第五号、一九六六・十一）

(32) 前掲（注8）

(33) 寺田前掲（注26）

(34) 安藤宏「『太宰治・晩年の執筆メモ』の問題点」（前掲（注9）に所収）は、「この頃から始まった『井伏鱒二選集』編纂の仕事の過程で、井伏の作品への批判意識を持ち始めた形跡もある」と指摘している。

(35) 太宰治「新しい形の個人主義」（『月刊東奥』一九四七・一）

(36) 太宰治「徒党について」（『文藝時代』一九四八・四）

(37) 長野隆編『太宰治その終戦を挟む思想の転位』（一九九九・七、双文社出版）、山崎正純「『斜陽』―敗戦後思想と〈革命〉のエスキス」（『国文学』二〇〇二・十二）などを参照。

(38) 坂口安吾「不良少年とキリスト」（『新潮』一九四八・七）の中にある「太宰は通俗、常識のまッとうな典型的な人間でありながら、ついに、その自覚をもつことができなかった」という言葉を想起してみてもいいだろう。

(39) 寺田前掲（注26）

(40) 寺田透「最近の井伏氏」（『現代日本文学全集41』一九五三・十二、筑摩書房）。

(41) 中村前掲（注30）